

図書館は「生活の根拠地」 戦後の焦土から出発した建築家の挑戦

清水有香 | カルチャー | 速報 | アート・書

毎日新聞 | 2023/4/15 09:00 (最終更新 4/15 09:00)

有料記事 2513文字



「鬼頭さんの建築には優しさがある」と語る松隈洋・神奈川大教授。展示の写真は日野市立中央図書館で、下段の資料も探しやすい特徴的な形の本棚は鬼頭の設計による＝京都市左京区で2023年3月22日、清水有香撮影

本棚の間を歩き回り、気になる本があれば直接手にとって自由に読める。そんな図書館の風景が国内で当たり前になるのは、戦後に入ってからのことだ。書庫が中心の閉架式から、「民主主義の時代」を象徴する開架式へ。図書館が大きく変わり始めた1950年代に設計の仕事をはじめた建築家、鬼頭梓（26～2008年）は、市民に開かれた自由な空間を手がけ、「図書館建築のパイオニア」と呼ばれた。半世紀に及ぶ活動の中、追い求めたのは「生活の根拠地」としての図書館だった。

赤レンガが美しい兵庫・淡路島の洲本市立洲本図書館。明治末に建てられた鐘紡の旧紡績工場を改修し、新築部分も含め98年に完成した鬼頭の晩年の代表作だ。坂口祐希館長の案内で正面のゲートをくぐり、100年前のレンガが敷き詰められた中庭を歩く。「洲本図書館は長く公民館に間借りし、『きちんとした新しい図書館を』という市民の声からこの館が生まれました。毎年秋には『図書館市民まつり』が開かれ、多くの人を訪れています」と坂口館長。

館内には丸テーブルが並ぶ閲覧スペースの上、吹き抜けの天窓から春の日差しが注ぐ。大きなガラス窓沿いには中庭を望むように椅子が置かれ、腰掛けた人は本の世界に没頭しているようだ。15万冊もの開架図書は1階部分（約2400平方メートル）のフラットな床面に集約され、みな思い思いに本を選んでいる。暮らしに溶け込んだ空間に流れる、一人一人の穏やかな時間。そんな光景を前に、鬼頭の言葉を反すうする。

＜戦争が終わってみれば、やっぱり建築がやりたいと思ったんです。戦争で破壊された生活の根拠地を作りたかった＞（「建築家の自由」建築ジャーナル、08年）



洲本図書館内部に広がる吹き抜けの空間。高い天窓から柔らかな光が注ぐ = 兵庫県洲本市で2023年3月30日、清水有香撮影

戦前の図書館は閉架式

洲本の図書館を訪ねる前、記者は京都市左京区の京都工芸繊維大美術工芸資料館へ足を運んだ。そこでは、鬼頭建築に光を当てた初の展覧会が6月10日まで開かれている。「鬼頭さんは戦後型の図書館とともに歩んだ先駆者であり、それに形を与えた人。当たり前の生活が奪われた戦時下をくぐり抜け、戦後の民主主義の時代に建築は何ができるのかを、生活者に近い目線で考えたんだろうと思います」。企画・監修者の一人で、この春に神奈川大へ移った松隈洋教授（近代建築史）は語る。80年から20年間、前川國男（くにお）建築設計事務所にいた松隈さんにとって、鬼頭は同じ事務所の先輩にあたる。

東京・吉祥寺生まれの鬼頭は戦時中の42～44年、旧制一高で学生生活を過ごした。東京大を卒業し、前川事務所に入所したのは50年。日本はまだ占領下にあった。戦前の図書館は閉架式が一般的で、利用者は目録で資料を探して請求票に記入。職員が書庫から持ち出した本をカウンターで受け取った。当時は主に閉架の書庫と閲覧室、事務室で構成され、公立でも有料の館があったという。誰もが自由に本を手に取り、無料でサービスが受けられる開架式図書館の普及は、連合軍総司令部（GHQ）による民主化政策の一環だった。

そんな時代に設計活動を始めた鬼頭は、日本のモダニズム建築をリードした前川の下で神奈川県立図書館・音楽堂（54年）や国立国会図書館（61年）を担当。64年の独立後、日本建築学会賞を受賞した東京経済大図書館（68年）や山口県立山口図書館（73年）など、全国で30以上の図書館を手がけた。中でも東京・日野市立中央図書館（73年）は鬼頭にとって「図書館建築を生涯のテーマとする決定的な意味を持った」と松隈さん。一台の移動図書館から出発し、この館を導いた初代館長、前川恒雄の「市民とともにある図書館」という信念に深く共鳴したのだ。展覧会では初期から晩年までの16作品を設計原図や模型、写真とともに紹介している。

吹き抜けと大きな窓

鬼頭建築を特徴付けるのが、高い吹き抜けと大きな窓だ。それが「どの作品でも明るく爽やかな印象を与え、公共空間としての質を支えている」と、平尾良樹さん（26）は考える。この春、鬼頭建築に関する修士論文を京都工芸繊維大大学院に提出し、論文は今展のベースにもなった。



明治期に建てられた紡績工場を改修した洲本図書館。赤レンガの囲いに設けられたゲートは中庭に続き、建物に入るまで段差はない＝兵庫県洲本市で2023年3月30日、清水有香撮影

各地の鬼頭建築を訪ね歩いた平尾さんは、最も印象的だった図書館に洲本を挙げる。ゲートの内外と図書館のメインフロアには段差がなく、車椅子の人や足腰の弱い人でも利用しやすい「人間に対して開かれた場」と表現。それは「鬼頭さんが繰り返し主張していた『フラットフロア・ノーステップ』の思想そのものであり、図書館建築の到達点であるように思いました」。

<図書館は皆のものであり、本の場所であり、そして私一人の場所でもある>。鬼頭はかつて論考にそう記したように、「平らで広い、自由な空間」を新しい図書館に求めた。と同時に「一人静かに本を読む場所」というイメージにもこだわり、一つの館にバリエーション豊かなスペースを配した。とりわけ鬼頭が好んだ吹き抜けについて、松隈さんはかつて設計事務所に使われ、所員たちが集った「前川國男邸」の吹き抜けの居間に言及。「無駄だと思われるボリュームのあるおおらかな空間が、人々のよりどころとなるという感覚を体験として持っていたのでは」と推測する。鬼頭は人が触れる書架や閲覧机も自ら設計し、あくまで利用者や館で働く人の視点で考えることに徹した。

コモンをどう育てるか

松隈さんは00年、京都工芸繊維大に赴任。以降は研究会などで鬼頭と一緒にいる機会も多く、生前最後となったロングインタビューでは聞き手を務めた。そこで鬼頭は「建築はやっぱり人間の場所。人間に対する思いや尊敬、愛情といったものが建築の一番基本なんだろうと思います」と語った。

松隈さんは「建築は人間の喜びや悲しみを受け止める場所でないといけぬ。それが、戦後の焦土から出発した鬼頭さんの初心だったんだと思います」と話す。「『生活の根拠地』は今の言葉でいえばコモン（共有地）。人々にとって身近なよりどころとなるコモンをどう育てるか。子どもたちのために情報環境をどう整備するか。民主主義の根幹に関わるこうした大事な問題を、鬼頭さんの図書館は今の時代に改めて問いかけてくるのではないのでしょうか」【清水有香】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.